世紀末に揺らいだ

オットー・ワグナー自邸

第二ヴィッラ（1912-13）

ウイーン　オーストリア

第一ヴィッラ（1886-88）

ウイーンの町はオットー・ワグナーのギャラリーといってもよいほどに、ワグナーの美しい作品が散在います。
ワグナーとアールヌーボーの結び付きをみせるカールプラッツ地下鉄駅、あっと目を引くのが花柄模様を壁にあしらったマジョルカハウス。そしてワグナーの才能をみせつける郵便貯金館。

世紀末の様式建築と装飾の時代から近代建築に乗り移る、その狭間を支えた巨匠の作品には、装飾と平滑の二つの葛藤がみれます。古いシガラミからの脱出を試みた新芸術活動であるゼセッションを支え、自らはアールヌーボーの技をもち、装飾を否定したアドルフ・ロースと同じウイーンで活動しながら、ワグナーは揺れ動く時代に埋没せずに、自らのデザインをみせつけました。
壁を枠取りしてそこに美しい表情をつくり、郵便貯金局では壁材をボルトで止めたかのような張り物の壁をつくって、壁を独立させながらも表面の協調を生み出すのです

数多い作品の中で最も興味深いものといえばやはりワグナーの自邸。
というのも直ぐ近くに二つの自邸が建設されていて、それらは世紀末を挟んで２５年の隔たりをもちながら、その狭間の揺れ動くワグナーのデザイン変遷をみせています。

第一ヴィッラ（1886-88）

第二ヴィッラ（1912-13）